

「青年海外協力隊」

新村 桂

NIIMURA
Katsura

悩み、考え、動いた先に
見つけた自身の役割

インド洋に面した美しい海岸線、アフリカや中東、ポルトガルの文化が融合した美しい街並み。アフリカ大陸南東部に位置するモザンビークは、近年、新たな観光地として注目を集めている。

「この島で私にできることなんてあるんだろうか」。青年海外協力隊として初めてモザンビークへ渡った新村桂さんは、そんな思いを抱いていた。活動地は、

JICA Volunteer Story

PROFILE

1988年神奈川県出身。大学卒業後、人材サービス会社に就職。2013年9月から青年海外協力隊（青少年活動）としてモザンビークで活動中。



「子どもたちの可能性を広げたい」と、日本語や折り紙なども取り入れて授業を工夫している新村さん

「子どもたちが楽しみながら学べる環境を」

モザンビークの世界遺産、モザンビーク島で、教育環境の改善を目指して奮闘する新村桂さん。学ぶ楽しさを知った子どもたちの変化が、島の先生たちの意欲も引き出している。



1991年にユネスコの世界遺産に登録されたモザンビーク島。海の恵みの恩恵を受けながら暮らす人々の生活は、何不自由ないように見えたからだ。

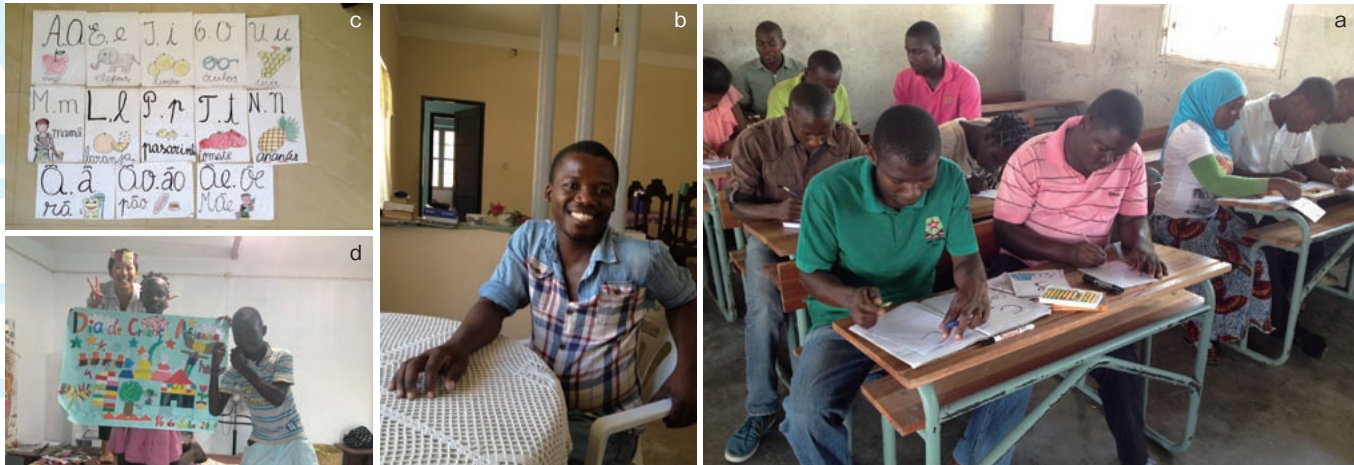
しかし75年の独立以降、長年にわたって続いた内戦の爪痕は、この国の未来に影を落としていた。特に、内戦の影響で教育を受けていない人々の状況は深刻で、貧困や格差の要因にもなっているのだ。

高校生の時、母親の勧めでベトナムの児童養護施設でボランティア活動を経験した新村さん。恵まれない環境の中で懸命に学ぼうとする少女に出会い、「世界の子どもの役に立ちたい」と思うようになった。大学卒業後は人材サービス会社に就職したが、「もう一度、国際協力の現場に行きたい」と、協力隊への参加を決めた。

「子どもたちを元気にする活動がしたい」。そう張り切っていたが、配属先のNGOにJICAボランティアの役割が十分伝わっておらず、悶々とした日々を過ごしていた。「どんな思いで日本から来たか、何かできることはないか、話し合ってみよう」と、NGOスタッフに思い切って相談することに。そこで初めて、島には授業に付いていけず、自信をなくしている子がたくさんいることを知った。彼らの学ぶ意欲を高め、学力向上につなげる取り組みこそ、私がすべきことだ。新村さんは地元の小学校を巡回し、子どもたちのサポート役を務めることになった。

子どもたちの理解を助けるアイデアを

以降、島内の4つの小学校、2つの学童施設で絵画や工作を教えるなど、忙しく過ごす新村さん。そんな中で、この国の教育の課題がさらに見えてきた。モザンビークでは、小学校の授業でポルトガル語が



a.巡回先の学校では、歌や運動を取り入れた授業案を先生たちに提案すること
b.子どもたちの成長と一緒に支えてきたアメリコ先生。授業が終わった後、先生の自宅で意見交換を繰り返した
c.カラフルなイラスト付きのアルファベットカード。現地の先生との共同制作だ
d.学童施設の美術の時間では、ペットボトルのふたや紙バック、トイレットペーパーの芯など身近な材料を使ってものづくりの楽しさを伝えている

使われる。しかし、モザンビーク島では就学前は現地語のマクワ語しか話せない子がほとんどで、高学年になっても基本的な読み書きができなかったり、学校に通えなくなってしまうたりしているのだ。

「ポルトガル語が分かるようになれば、学校が楽しくなるんじゃないか」。新村さんは、ポルトガル語に触れる機会を増やそうと、イラスト付きのアルファベットカードを作ったり、歌や手遊び、絵本など楽しみながら学べる手法を授業に取り入れることに。それぞれの学校の先生とペアを組んで、授業の計画や実施、振り返りなど全てのプロセスを共有していた。

そうすると、いつも授業に遅れがちで、席についても集中力のなかった子どもにも変化が起きてきた。少しずつ授業中に笑顔が見られるようになり、算数の覚え歌を大きな声で歌うようになったのだ。また、「先生、もっと問題出して！もっと解きたい！」とノートを持ってくる子も増えた。

「カッラのアイデアが子どもたちの背中を押してくれた」「絵本は特に好評ね。また新しい本を探してみよう」。巡回先でペアを組んだ学校の先生からの言葉が、何よりもやりがいにつながっている。その一人、アメリコ・ジルムーラ先生は、新村さんの提案を積極的に取り入れ、放課後も生徒の家庭訪問や、自宅学習を助ける宿題プリントの準備など、昼夜を問わず、一緒に授業を盛り上げてきた。2人で夢中でできることを探し続けてきたことで、子どもたちの成績アップにつながったのだ。

「楽しみながら学べる環境をつくることで、子どもたちの興味の幅を広げ、彼らの可能性を膨らませたい」。新村さんは、そんな使命感を持って、今日も島の学校を巡回している。